



周縁的コミュニティで創作する女性アーティストとして：
社会変革のための芸術をめざして(二〇〇〇年度第一回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: エディソン, ローリー・トビー メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004961

周縁的コミュニティで創作する女性アーティストとして —社会変革のための芸術をめざして

ローリー・トビー・エディソン

1. 女性アーティスト・コミュニティで学んだこと

私はこれまでずっと勤めをもたない一種の自営業者として働き生活してきたのですが、つねになんらかのコミュニティ（仲間、共同体、人のつながり）のなかにおいて、そこからの支持、支援をもらってきました。考えてみれば、私の祖母は工芸職人で、都市のマイナーな芸術家コミュニティの一員として、作品を売って生計を立てていました。また、ダンスの振付師である私の娘は、重なり合う複数のコミュニティのなかにおいて、それらに支えられて仕事をしています。

私自身が女性アーティスト・コミュニティの一員として仕事をした最初の経験は、まだ宝飾品と彫刻ばかりをつくっていた頃にさかのぼります。宝飾品作家というのは芸術家でもあり工芸職人でもありますが、私はたくさんの女性工芸作家たちとともに仕事をしました。私はサンフランシスコの「女性工芸品フェスティバル」を企画し主催する団体の、設立以来の構成員であり、15年間にわたって同フェスティバルの運営にあたりました。このフェスティバルは、女性だけで行なうアートと工芸の審査展としてはアメリカ合州国で唯一のものでした。

そこで学んだことですが、女性アーティスト・コミュニティの意義は、アーティストとして生きていくために必要な具体的な知識を女性たちが互いに教えあうことにあります。私たちが教えあったことといえば、作品の値段をどう設定するか、どう展示するか、作品を売るための場所をどうやって見つけるか、自分の展覧会をどのように広報するか、といったことです。私たちは議論もし、互いに賛成しないこともあったし、また見過ごせない重大な違いもありました。コミュニティは仲間ではあっても、それは全面的な意見一致と安心が得られる場所だということではありません。

芸術創作で重要なのは、まずはアーティスト自身の喜びであって、それは作品の外面的な質では測れないものだとは私は考えています。主流の価値

観や芸術観をよしとしないために社会の周縁に置かれたアーティスト・コミュニティというのは、芸術創作の喜びを促し育むうえで好適な場です。そのコミュニティが仲間のアーティストに敬意を払っていれば、全構成員の芸術的貢献を大切にしながら、同時に、美学的審査も行なって、作品がもつ社会的意味と純粹芸術としての価値を評定し、合格作品を展示するということもできるものです。こういう状況でなにより重要なのは、その周縁的コミュニティならではの価値観を重視し、主流の芸術規範に立つ価値観をただなぞることのないようにすることです。そうでないと、新興コミュニティから新しい芸術が育ち開花することはありません。

工芸品フェスティバルを開催するなかで私たちが学んだことは、互いの作品をどう評定するか、また知らない人の作品をどう評定するかということでした。どんな女性の作品にも敬意を払うにはどうしたらよいか、また彼女たちの生きてきた歴史と社会的文脈を知ったうえでその作品の価値を評定するにはどうしたらよいかを私はそこで学びました。

主流の美術・工芸の世界は一般に、修業中のアーティストに創作、展示、販売に関する具体的ななにかを教えてくれることはないものですが、そのなかでも女性が入手できる情報は男性に比してさらに少ないのです。女性工芸品フェスティバルで私たちがしたように、女性が連携して情報や知識を共有することがなければ、障害を打ち破って作品を作家が見せたいと思う人々に見せることはできなかつたでしょう。作品がだれの目にも触れないなら、むろん収入の道は閉ざされ、人々からいろいろな反応をもらって、さらによい作品をつくっていく機会も閉ざされることになります。

2. *Women En Large* の写真家として——創作の基盤となった3つのコミュニティ

写真家としての私もやはり、コミュニティのなかで、つまり人々のつながりのなかで創作するアーティストといえるでしょう。ただしつながり方はそれまでとは違っています。

Women En Large 作品シリーズは、そもそも或るコミュニティのプロジェクトとして始まりました。写真を撮りはじめる前から、私はデビ・ノート

キンとともに、SF愛好者が集まるコミュニティで、女性身体イメージについてなんか研究発表をしていました。SFの会の人々は、このテーマに深い関心をもっていました。

宝飾品作家として私がつくる作品は、社会変革をめざすものではありません。もちろんそこには私の女性観、審美観が表われており、私が女性の力や強さについて考えていることを作品に込めようとしているのはたしかです。*Women En Large* のシリーズ写真を制作しはじめる前も、私は生計を立てるための芸術と、社会変革をめざす芸術に同時にとりこんでいましたが、その両者をつなげるということはしていませんでした。このシリーズにとりくむようになって学んだのは、社会変革のための芸術はコミュニティの支援に大きく依存し、またそことの常時の緊張関係のなかにあるということでした。

コミュニティとは何かを定義するのは容易ではありません。私たちはだれしもなんらかのコミュニティのなかに生まれ落ちるわけですが、これは私たちが選択できるものではありません。ただしその生来の所属コミュニティとどう関わるかを選択することはできますし、そのコミュニティの価値観のなかから何を自分のものとするかについても選択する余地があります。しかし社会のなかで主流の力ある文化が、あなたの生まれついたコミュニティを、またそのなかにいるあなたをどう扱うかについては、あなたに選択できることはありません。

Women En Large の作品としての成功は、3つのコミュニティのおかげでした。まず、先述した、ノトキンと私が所属するSFの会。私たちはここで女性と身体イメージについていまでも発言を続けています。次に、サンフランシスコの女性たちがつくる政治運動グループ。これにアメリカ各地にある女性の政治運動グループも加えるべきでしょうか。私たちはそうしたグループに招かれて数多くのスライド・ショウをし、討論を重ねてきました。そして3番目のコミュニティは、太った人たちがつくるファット解放運動の活動家グループです。この構成員は、全員とは言わないまでも、ほとんどが女性です。

サンフランシスコで女性がつくる政治運動のコミュニティというのは層

の厚いものです。1990年に *Women En Large* を作品として見せはじめた頃は、女性の本屋さん、女性のコーヒーショップなどがいくつもあり、作品発表の場にはこと欠きませんでした。のちに大企業のビジネスに押され、経費の高騰に対応できずに、その多くが閉鎖に追いこまれましたが、いまでも継続している女性の催し物（たとえば、前述した女性工芸品フェスティバル）や女性の集会場もあり、女性の浴場もまだ健在です。90年当時は今の比ではなく、作品を見せるのに忙しくしていました。

肥満恐怖からの解放をめざすファット解放運動の活動家コミュニティはごく規模が小さく、また知られてもいないものでした。私たちはそのメンバーの数人を知っていました。私たちの作品を見せるや、すぐに理解してくれました。

それらのコミュニティに私たちが求めたのは3つのものでした。女性アーティストのほとんどが、同じ要求をもっているものと思います。第1に、私たちは作品を支える思想的、理論的な支柱について、作品を理解してくれる人々と討論したいと思いました。作品で表現していることが含みもつあらゆる意味をしっかりと把握しておく必要がありましたし、作品がそれを見る人々にとってどういう意味をもつかを知っておきたかったのです。社会変革をめざす芸術作品には、広い社会基盤に支えられて展開してく理論的構造が必要です。それは作品の表面にありありと出てはいなくとも、作品を支えその位置を決める重要なものです。

第2に、私たちは作品が発展していくにつれて、ある特定のフィードバックを必要とするようになりました。たとえば、次のような問いへの答えがほしいのです。女性たちは見たかったものを見たと思っただろうか。作品は、社会変革の必要を、人々に理解できるしかたでうちだしているだろうか。私たちが見逃してきた不快さや問題点はないだろうか。

第3に、作品を制作するには経済的な支えが必要です。私たちはこの作品の重要性を確信しており、これは肥満恐怖を抱いて肥満の身体で生きている人々の人生を変えるものだと思っています。そこで私たちは、この社会変革をめざす作品への経済的支援をファット解放運動のコミュニティに頼みました。

以上、私たちが求めた3つのものはいずれも十分に、先にあげたコミュニティから与えられました。

こうした経験から、特にどの写真が見る人を不安にさせるのかを知るようになりました。たとえば *Women En Large* には、妊娠女性を写した1枚があります。首から下、太ももから上しか写っていません。私たちは、その写真には古代女性神像の美に通じるものがあると思っていました。ところがこれを見た女性のなかには、作品中の女性は頭部が写っていないためにモノ化されて、個性をすっかりはぎとられていると受け取った人もいました。やがて、この1枚を、女性の顔だけを写した別の1枚と並べて1組にして見せると、人々の不安はみごとに消えることがわかりました。このシリーズ作品を重要と思い、率直な意見を言ってくれる女性コミュニティで作品を見せるということをしなかったなら、作品の問題点を知ることはなかっただろうと思います。

むろん彼女たちが返してくる意見に耳を傾げるからといって、作品をコミュニティの意に任せることはできません。私自身の意見ははっきりと表明しなければなりませんし、作品を最終的にどういうものにするかを決めるのは私です。自分がコミュニティから何を期待されているかを知るのは大切ですが、それは私の目、私の最終的な芸術的判断以上に大切なわけではありません。この作品はコミュニティの影響を受けていますが、けっしてコミュニティがつくったものではないのです。

複数のコミュニティに重複して属することの意味はここに 있습니다。女性のコミュニティは必ずしも肥満と身体サイズについて深い理解があるとはかぎりません。また彼女たちは、私が男性の写真を撮ることについては、あまり支持してくれません。ファット解放をめざす人々のコミュニティは、必ずしもフェミニズムのいろいろある課題に関心をもっているわけではありません。どちらか1つとだけ関わるよりも両方に関わるのが、私には大きな意味をもちました。

あるとき、男性向け娯楽雑誌『プレイボーイ』を出版するヒュー・ヘフナーに、作品制作ための助成金を申請する機会がありました。ヘフナーの財団は社会問題をあつかう進歩的な芸術の助成をしています。コミュニテ

ィに相談したところ、「その金は使うべきではない」という意見でしたので、助成金申請はしないことにしました。私たちが尊重したいコミュニティの意見とは、こういうものです。Women En Large のための資金は、草の根コミュニティだけで集めることにし、それはたいそううまくいきました。

他方で私は、妊娠している女性の写真をシリーズから削除することは、それを不快と見る人がいようとも、頑としてしませんでした。また、コミュニティの人々が、私が撮った或る1枚の写真を政治的表明が明確だからという理由で推しても、写真としての完成度が低ければ私は採用しませんでした。どの写真が自分の作品として最高の出来かを決めるのは私であり、それがいつもコミュニティの賛成を得られるとはかぎらないのです。

写真芸術には多様な面があり、私はそのうちのある部分ではコミュニティの価値観を反映しますが、だからといって私の写真はコミュニティの作品ではないのです。サンフランシスコの女性コミュニティもファット解放のコミュニティも、構成員は圧倒的に中流階級白人女性です。もしWomen En Large がそれらのコミュニティを表現するものであったら、いまあるように写真の40パーセントが有色の女性ということにはならなかったでしょう。この比率は企画の最初から私が考えていたもので、これを守り抜いたことは大きな成果を生みだしました。おかげで有色女性からの意見をもらいやすかったし、モデルの申し出も、エッセイ寄稿の申し出も多くありました。見てもらった制作途上の作品のなかにすでに有色女性は何人も登場していたので、信頼して協力を申し出てもらえたのだと思います。のちに完成した作品は、ほぼ主流といってよい（あるいは周縁的な中心というべきか）アフリカン・アメリカンのファッション雑誌で認められ、肯定的な評価をいただくようになりました。

階級の視点も Women En Large の写真では重要で、ここにはさまざまな階級の人があります。写真集は階級横断的に売られています。もともとこの本は、広く人々に届いて社会変革をつくりだすための道具として企画しました。本は末永く残ります。人々の手から手へ伝わって共有されますし、図書館にも入ります。アメリカ全体でいえば美術館に行く人は少数で、本に

しなければこの作品を見ることのない人がたくさんいるのです。

3. 主流の美術界と社会変革のための芸術

少なくともアメリカでは、周縁的コミュニティこそは、女性アーティストが作品をつくるのに適した場所、どうかすると唯一の場所です。むしろコミュニティがアーティストを歓迎しない場合もありますし、アーティストのなかには、自分を支えてくれるコミュニティを見つけられないままの人もあります。しかし機会が目の前にあるなら、周縁で活動することは、芸術創作として可能性に満ちていて、挑戦しがいがあります。

私たちは、エッセイも含めて作品がすっかり完成するまでは、主流の美術界で見せることに関心はありませんでした。商品化が進む主流の美術界に私たちの作品をとりあげてもらおうと思えば、常時容赦ない圧力にさらされることとなります。作品を「穏健な」ものにするよう、また根拠は怪しいが強力に機能している主流の審美観にアピールするよう、単純化して小さく切り整えるといったことを求められます。私たちが頼りにした小さなオルタナティブ・コミュニティは作品を批判しますが、その批判は思想性をより緻密にし、メッセージをより明確にし、問題の掘り下げをより深めることをめざして、寛容の精神から出てくるものです。主流の美術界の要求はこれとは逆です。脅威を感じさせるもの、現実への真の挑戦はタブーです。主流の美術界が思想的深さと自己省察の鋭さを求めるかに見えることがときにありますが、そういう質が意識して追求されることはありません。

社会変革をめざす芸術にとりくむというのは、コミュニティと主流美術界のあいだの緊張感に終始向き合うことです。この緊張感にどう向き合うかは、アーティスト各人によって異なるでしょう。私の場合は、とても意識的に行なったことがあります。

私たちの作品は複数のコミュニティでの対話のなかから生まれたものなので、かなり高度な一般性をもち社会全体に資するという自信があります。社会変革をめざす活動家のコミュニティは真空中に存在しているわけではなく、あるコミュニティの構成員は別のコミュニティの構成員でもあると

いかたちでコミュニティ間につながっています。私は意識して、コミュニティとコミュニティのネットワークをつかむようにし、新しいコミュニティを紹介してもらっては、意義ある助言を集めました。作品が完成したときは、主流の美術界で見せることにも積極的にとりくみました。主流に入りこめば、周縁的なコミュニティでは不可能な2つのことが可能になります。つまり、たくさんの人に作品を見てもらえること、そして周縁の人々のメッセージに光を当てる機会があることです。社会変革をめざす芸術が主流に入りこむと、もともとそれが出発したコミュニティでもつ機能とは別の機能を持ちます。そうした芸術は、主流の価値観に照らすと、まったく新しいなじみのないメッセージと見られることが普通です。主流の美術界で社会変革の芸術がなすべき仕事は、まずは社会の現状を新しい視点で見るための学習に道を開くことです。他方でその作品の出発であるコミュニティでは社会変革のための芸術の仕事は、すでに始まっている過程をさらに推進することにあります。作品を支える考え方が、コミュニティの人々にとってまったく新しいものだということはめったにありません。だからといって完全に理解しているということもないし、全面的に同じ価値観に立つということもないものです。

Women En Large を、主流の場所や主流の媒体をとおして知った人々は、それまでは太った女性を美しいと見る可能性についてなど、考えたこともありませんでした。コミュニティの人々は、まず女性の身体イメージを取り巻く社会的規範に居心地の悪い思いを抱いているので、その居心地の悪さに挑戦しなければならないことを知っています。彼らは、難しい課題にも積極的にとりくむ覚悟ができています。主流では、そうした挑戦を、直接的、対決的なかたちで提示すると受け入れられず、穏やかな攪乱といったかたちで出したほうがよいようです。

周縁的コミュニティはそれが周縁的である以上、主流の場でその思想を展開する回路はもたないものです。社会変革をめざす芸術が芸術として成功して主流に入りこんだ場合、周縁的コミュニティの思想を主流へと伝える役割を担うことができます。私が主流の場で展示する機会を考えるのは、作品がすっかり完成し、もうこれを単純化したり穏健にしたりという変更

をするには遅すぎる、あるいは作品に込めるメッセージを自己規制するには遅すぎるという段階になってからです。主流の定期刊行物は作品を単純化、無害化して伝えようとするものですが、それでも作品が十分に考え抜かれて妥協のないものであれば、作品自体がおのずと語るものです。*Women En Large* と *Familiar Men* の発表後に、私はあらゆる評論をチェックしましたが、どの場合も必ず1枚は写真が複製されていましたので、評論文がどう言っているようにも、読者は作品そのものを目にすることができたとわかりました。

主流の場所や媒体に作品が出るようになると、いくつもの覚醒の物語が伝えられてきます。裸で鏡の前に立ち自分の体を見る勇気をもたなかった人が、展覧会から帰宅するや、服を脱いで鏡のなかに見えるものを好きになろうとしたという話。あるいは、毎日スポーツジムに通って筋骨隆々の体をつくりあげることに熱心な男性が、自分のその情熱の由来を理解するようになったという話。また、拒食症の女性で、実際には骨と皮だけの痩せた体であるのに肥満だと思っている人が、自分の恐怖を解読できたという話。そして、身体の障害をもつ男性が、自分の体の比類ない美しさが見えるようになったという話。

こうした反応は、写真だけを展示したのでは得られないものだと思います。私は、写真を展示するときは必ずテキストも一緒に出します。なぜなら周縁的コミュニティからのメッセージは、写真そのものと、壁に掲げられたテキストという、2つの回路を通じてこそ伝わるものだからです。テキストがないと、主流の展示機構に出された写真は純粹芸術として鑑賞され、それが社会変革としてもつ価値は忘れられるか、無視されてしまいます。私の作品では、テキストは写真の被写体となった人たちが書いたもので、主流の観客たちに、できれば彼らが無視していたい周縁的コミュニティの存在と、たとえいつときであれ、直面することを促します。テキストと写真の組み合わせは、心を開き頭を切り替えてもらうためのものです。

作品が主流に受容されても、アーティストがコミュニティに負っている責任にかわりはありません。私の作品はコミュニティの強い影響のもとにつくられたものであり、コミュニティこそは作品のメッセージの源泉です。

主流でなにほどかの成功を収めた女性アーティストにとって、もともとの周縁的コミュニティを捨てて、主流へと身移したい誘惑に駆られるのは事実です。

コミュニティの人々はこれには強い反感を覚えるでしょうが、それよりも深刻なのは、主流へと移動することでアーティストの作品が力と一貫性を失うことです。温かい支援と厳しい評価をしてくれるコミュニティがないと、口当たりのよい芸術を求める主流の美術界の圧力をはねかえすことはできないでしょう。あとは商品化の道が待っているだけです。そうではなく、作品が主流の機構で展示され、評論されるようになって、作品が主流の世界とコミュニティとの橋渡しになればよいのです。実際、ノトキンと私は、いくつもあった主流からの誘いを、検討の結果、断ってきました。たとえばテレビですが、その多くは私たちの作品を真剣にとりあげようとはせず、ちゃかすだけだと判断して断りました。いちど、男性向けのラジオ番組出演を承諾したことがありますが、このときは事前に入念な打ち合わせをし、作品にも私たちにも十分な敬意を払うようにと強く要求しました。これはかなりうまくいき、番組を聞いた人たちが、当時私たちが作品展示をしていた女性の本屋さんやコーヒーショップを訪れてくれました。ラジオで聞くことがなければ、ふだんはそんな店に来ることはない人たちです。しかも私たちの要求のおかげで、ちゃかすようなトーンの放送ではなかったため、作品を見にきた人も真剣に見てくれました。私たちの作品は、被写体となってくれた人たちへの深い敬意があっただけでこそ成立したものであり、展示の場でも彼らが侮辱されるようなことがあってはならないのです。社会で力をもつ身体イメージの規範を問うのがこの作品の趣旨ですから、これは重要なことです。

作品が広く社会的認知を得た場合、その作品が多くを負ってきた周縁的コミュニティのそれまでの貢献を、公的に表明することが必要です。この作品の成功は、みずからは芸術表現に携わることのない人々が、率直に懸命に支えてくれたからこそ実現したのですから。

作品が主流の媒体に載るようになると、私たちは作品の楯となって、望まない搾取からそれを守らなければならなくなります。この数年間で飛躍

的に拡大したウェブの場合も同様です。インターネットはたしかに、多くの新しい、またわくわくするような機会をコミュニティにもたらしてくれます。自分たちだけではないんだという仲間の発見、会ったこともない人との課題の共有、物理的な距離を越える親密さの交換などは、インターネット時代の新体験でしょう。しかしウェブはまた、作品が予想外の搾取をこうむり、悪用されることもある戦場でもあります。*Women En Large* の作品はウェブ頁に掲載していますが、それが肥満女性を侮辱したい人々の標的になったことがあります。コミュニティの人々がそれを見つけて私たちに教えてくれたので、私はふさわしい対処をして、モデルとなった人の尊厳を守り、また私がつ作品の著作権を守ることができました。コミュニティの協力がなければ、私の作品は無防備に侮辱にさらされるだけとなります。

社会変革をめざす女性アーティストとして作品をつくる私にとって、同じ変革の課題をもつコミュニティの支えは不可欠なものです。むろん私の判断で作品を主流に持ちこむことはありますが、それはコミュニティとの決別ではなく、コミュニティの思想と価値観を広く知ってもらうために橋を渡すということなのです。

(翻訳：萩原弘子)